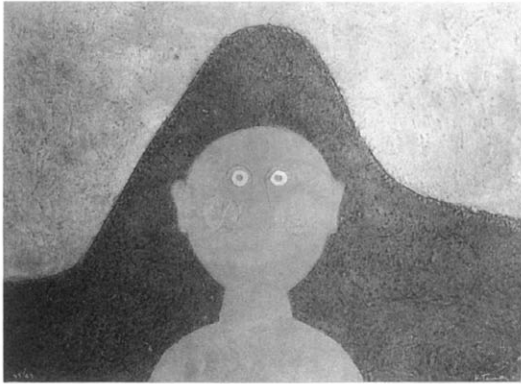


矢ヶ崎 孝雄



「赤い男」 75.5×56.0

ムバとの共同研究の成果といわれ、「ミソグラフィア」と称しています。これはあらゆるタイプの材質、刷地の使用が可能といわれます。まずプラスチック版に絵を描いてワックスをかけ、そこから印刷用の銅板を作るという、まるで銅の鑄型を造るようなやり方です。銅板画にはメゾチントやドライポイントのように直接刻み込むものと、エッチングやアクアチントのように薬液によって腐食させる技法がありますが、タマヨはこれらすべてを総括するような技法を開発したようです。身の回りのあらゆる立体物を銅の鑄物に置き換え、それらをネジや溶接で繋いでしまうミロの彫刻（オブジェ）を思い出します。

1899年メキシコの地方都市オアハカに生まれたルフィーノ・タマヨは、幼くして母を亡くし、後にメキシコ・シティで果物屋を営む叔母夫婦に育てられました。画家を志して国立美術学校に入学しますが、当時のアカデミックな授業より、ヨーロッパの最先端美術に多くを学んだようです。その後、同郷出身で哲学者、文部大臣のホセ・バスコンセロスに任命された国立考古歴史民俗学博物館民俗部門の仕事が、タマヨにスペイン征服以前の芸術に眼を向けさせます。その研究成果は、「タマヨ・プレコロンビア美術館」としてオアハカに存在します。有名なメキシコ壁画運動の提唱者でもあるホセ・バスコンセロスは、「西洋とアメリカの融合したラテン・アメリカ人種は宇宙的人種であり、彼らにこそ地球的規模での人間の新しい可能性がある」と考えた人です。タマヨの仕事はまさにこのことを造形的に実践したものとと言えます。

明治以来の日本の美術教育もまた、「西洋文明と自らの伝統を如何に融合させるか」という答えを探ってきたのではないのでしょうか。その明確で力強い解答例の一つがタマヨの作品群です。現在のところ虫干し程度にしかタマヨの作品が公開できていないのは、私どもにとって大きな課題です。一般にも常時作品公開のできる資料館の建設が待たれます。

(金城短期大学教授・美術学科長補佐)

これまで約30年間、私はよく海外を旅した。その折、博物館を見るのが楽しみで、各国の事情を知るよいよすがとなった。最初に訪れたシアトルのワシントン大学には附属の博物館があり、金沢大学にもかような施設をほしく思った。ここにはアメリカインディアン関係のものが多く、そのエキゾチックな点に興味をもたれた。市内にも各種の博物館があり感心したが、そのうちのある館で日本の古地図を示され、改めて年次を調べてやったところ、百年以上も前のものに驚き、50年前のものは博物館行きとの言葉に、私は印象を深かった。博物館で戦争前後の展示物を見るにつけ、このことが回想される。

トロント大学の博物館ではエジプトの浮き彫り壁画のレプリカが壁面一杯に展示されており、これにも感心した。のちにエジプトで実物の威容に接し感銘を深くしたが、レプリカの効果も大きいと思った。モントリオールでは町なかの会場にカナダ各地のクリスマスの室内風景を、クリスマスにちなみ展示してあり、その民俗的ニュアンスを楽しんだ。この会場の入口両側に日本の門松が飾られていたのには驚き、心にくい配慮と思った。

メキシコの国立人類学博物館には驚嘆させられた。規模が大きく、ヨーロッパの伝統とは異なった範疇の巨大な石像などには強く心をひかれた。これらインディオの文物を征服者スペイン人が多くを破壊したというが、英語を使う者は田舎者と自負する彼等がどうして破壊したか、のちにスペインで高度な文物を見て疑問に思った点である。



太陽の石 メキシコ人類学博物館

の作品を有田の博物館で見、区別のつきかたも印象深い。このあと欧州の磁器生産は大きく各地で発展したが、王室の支援もまた大きく、パリ郊外のセーブルはその一典型で、博物館と国立の製陶工場とがある。

かような人類の文化遺産を見るにつけ、ペスタロッツの「玉座の上にあっても、木の葉の屋根の蔭にあっても、互いに同じき人」という言葉が思い出される。メキシコのユカタン半島の遺跡の脇に暮らす粗末な土壁・草ぶき民家を見た時、この感を深くした。こうした格差の大きさをみるにつけ、革命が起きるのも無理もないと思われた。

この一方で、北欧を旅し注目したのは広大な敷地を持つ野外博物館である。その嚆矢とされるスウェーデンのスカンセン歴史博物館やデンマークのフリーランド・ムセーは典型といえよう。自国内を主に各地の民家を移築し、屋内には調度品を配し、伝統的な衣裳の婦人が仕事をしつつ、監視の役を務めている。外には畑や牧場が展開する。民族・民俗的な生活文化の博物館である。これらを見て日本の民家も決して遜色はないように感じた。

世界の博物館を瞥見してき、そのうえで私には長年描いてきた夢がある。それは我が国土のうちで広々とした敷地に野外博物館を設けることである。無料の循環バスを走らせ、その沿道に世界各地の標準的な民家と耕地・牧場・樹林などを配置する。その国の風土と生産活動、衣食住の生活などが総合的に見られ、かつ文献・絵画・音楽等の資料も広く深く用意しておく。若干のレジャー施設も必要となろう。これを世界文化地理博物館と称し、国際理解を具象的に進めたいのである。

(金沢大学教育学部名誉教授)



ロシア エルミターージュ博物館

ヨーロッパは博物館の発祥の地で、またそれが最も発展した州と言えよう。大英博物館やルーブル博物館は自国の文物のほか、他国のものを戦利品として、また略奪・寄贈・購入などして集めた総合的博物館で群を抜いたものである。秘宝・至宝といわれる王侯貴族等の絢爛・豪華・精緻な財宝が並ぶ。ロシアのエルミターージュ博物館や北京・台北の故宮博物院、トルコのトプカプ宮殿の宝物室も同様である。宮殿自体が博物館で文化財のところもある。メキシコやエジプトの博物館もまた同様な為政者側の展示物である。これらを見て為政者の権力・財力・識見と、それを文化財として今日まで継承してきた先人の努力にも感服させられる。また、そのかげで、これらを作製した無名の工人の技と情熱にも敬意を表したい。敦煌の石窟の片隅に工人の住んだという洞穴を遠望した時もこの感を深くした。

浮世絵の収集で著名なボストン美術館で、日本で見たこともない日本の文物が展示され、好意的に種々さらに見せてくれた。これらの流出を惜しくも思ったものの、管理がよく、広く人びとに鑑賞されるならば、何処にあってもよいだろうとも考え直したりもした。それにつけても中国の博物館で充分な管理のされていない所もあり、平山画伯の尽力も最もと思われた。なお、中国・日本の陶磁器が絵画や彫刻等とともに欧米で高く評価されていることにも注目したが、ドイツのマイセンで有田焼を研究・模倣し、同一レベルに達した両者



デンマーク フリーランド・ムセー